



日本共産党・前都議会議員 東京民報折りこみ版

そねはじめレポート

2012年 8月 15日発行 第51号

そねはじめ事務所

114-0032

北区中十条2-11-6

Tel: 3907-1135

Fax: 3906-3225

衆参選挙で増税ストップ!

消費税に頼らない 日本共産党躍進で

金持ち財界の応分負担や米軍・防衛費カットを!

五輪報道の合間をぬうように国会の激動が展開し、国民の根強い反対を押し切って消費税増税法案が成立しました。

★自・公のうらぎり鮮明に

自民・公明は民主の公約違反を非難しながら庶民増税の強行可決に手を貸し、後は「野党顔」に戻って内閣不信任を切り札に早期解散・総選挙で政権を奪い返すねらいでした。ところが共産党の呼びかけで増税阻止の一点で

7月の街頭宣伝：王子のそね前都議・山崎区議



下：赤羽駅前のそね前都議・さがら区議



7野党が共同し、内閣不信任の提出が実現したのです。自民・公明は内閣不信任決議に欠席して背を向け、解散は「近いうちに」という野田首相の口約束で合意するなど、国民の怒りを代弁すべき野党の役割を完全に投げ捨てました。

★増税実施ノ一の運動を

これまでと違って増税実施の前に衆参国政選挙でストップできるチャンスがあります。共産党は躍進に全力をあげます。

★増税めあてに公共事業

一方で「強靱な国土」の名でダム・港湾など大型公共事業に自民が2百兆円、公明が百兆円の大盤ぶる舞いを要求。原発再稼働とともに野田政権の財界言いなり路線に加担しました。

石原都政も「消費税を半分寄せ」と要求し、2兆円近い外環道路、北区では自然観察公園を分断する道路や、平塚神社付近からお寺や墓地など千数百件立ち退かせる道路計画などを防災を口実に狙っています。

★国民世論で政治が動く

増税で国民負担と景気の深刻化を招いた上、まちこわしと環境破壊まで押しつけられてはたまりません。国民世論で政治が大きく動く時代です。増税実施をくい止め、くらし社会保障の財源は金持ち・財界に応分の負担をさせる新たなたたかいを始めましょう。

8月19日教員後援会が支援ボランティア

★★9月以降もボラ希望者を募集しています★★

8月19日(日)から一泊二日の予定で、北区の学校教員後援会として東北被災地の支援ボランティアと被災地見学に出発します。北区の共産党から東北に派遣するボランティアはこれで12回目、派遣人数はのべ80人になります。今後も希望があれば個人・グループ問わず東北支援ボランティアへの参加を支援し交通や宿泊のお世話を続けます。問合せは北地区委員会災害対策本部、曾根はじめ、稲垣まで。



6月に石巻の仮設住宅を訪ね、支援を行うそね前都議と池内予定候補

非核・平和・原発ゼロの世界を！

9月1~2日 平和のための北区戦争展

◆1日(土)

12:00~映画「東京原発」
12:30~紙芝居「核の恐怖」
13:55~劣化ウランの恐怖
14:00~被爆者の証言
14:30~原発問題の真相
16:00~ディスカッション
「原発問題」

◆2日(日)

10:00~兵士としての証言
「戦争の真実」
10:00~映画「はだしのゲン」
11:30~南京事件の話
11:55~「軍隊を捨てた国」
13:00~朗読劇
14:00~市民の証言
15:30~内藤功氏講演

石神井川・荒川流域の水害対策待ったなし

都や国は再発防止に全力あげよ

昨年8月末の浮間スーパ一堤防からの水害、おと年7月初めの堀船水害を教訓に、最近の異常な猛暑と都市型集中豪雨による水害の危険に対処する新たな水害対策が急務となつています。

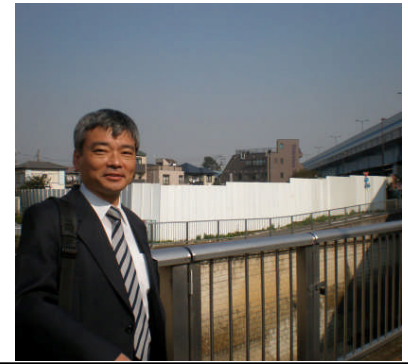
◆50ミリ対策を超えて◆

国土交通省は、浮間の荒川堤防から流出した雨水による浮間の住宅街への水害事故を防ぐため、昨年の1時間89ミリ豪雨の水準に対応する対策を打ち出しました。実効性は未解明ですが、50ミリを超える対策は画期的です。

◆今「想定外」は許されない◆

都もこの8月中に、都市型豪雨による水害対策として、初めての百ミリ豪雨対策を打ち出す見通しで、石神井川では白子川と環状七号線の地下貯留施設を

2010年12月、白子川から石神井川への地下貯水トンネル到達坑前に立つ
そねはじめ前都議



広域に接合する大規模なものになりそうです。根本解決はまだ先ですが、かなりの前進といえます。04年と10年の二度、石神井川の百ミリ豪雨で起きた堀船水害を徹底追及した住民運動と、共産党山崎区議・そね前都議のとりくみの成果であり、しかも3・11以後は、現実の危険があるのに「想定外」での責任逃れは許されなくなっていることを表しています。

そねはじめ交友録 <その四十五>

教育ひとすじで歩んだ90歳の“原点” 法元豊子さんの「ムグンファのうた」

ベテラン教員だった法元(ほうが)豊子さんが、最近長い教員生活やその後の活動を通じて書き溜めた小説や詩や童話、エッセイの集大成として「ムグンファのうた」(青風社)を出版されました。

90歳の身体に負担がかかるのを心配して、彼女の児童文学仲間が出版社との打合わせをすべて引き受け、8月に開いた出版記念会で青風社の社長と初対面の挨拶を交わしていました。

表題作の小説は、朝鮮出身の少年が終戦で母国に帰る前、親切だった主人公に、禁じられていた祖国の花「ムグンファ(むくげ)」の歌を教えてくれるという、戦争被害者であると同時に加害者でもあった日本人の醜さにも目を向けた小説で、文学の師・赤木由子氏の強い影響が感じられます。

しかしいちばん読者の心を温め、最も法元さんらしさを感じるのは、全作品から香り立つ、子どもへの無限の信頼感と愛情です。

これを「古き良き時代の教師の姿」と評するのはたやすいでしょう。それでも教育者が時代の濁流に流されずに進んでいくための、ただ一本の命綱は、昔も今もそこにしかないと感じるのは私だけでしょうか。

中でも、汚れた少女をていねいに拭いてやると思わぬ白い肌が現れ、「ばい菌」扱いしていたクラス仲間と仲直りするエピソードは、長い教育実践で一瞬のファンタジーを見逃さなかった著者の真骨頂だと思います。

法元さんが出版された「ムグンファのうた」

